琉球新報1986年6月6日

よみがえれ地方語

◎1◎

沖縄の実用地方語の活字表記 ①

船津 好明

本稿は、沖縄の地方語の歴史と現状にかんがみ、特に文化の伝統性との関係を重視し、その発展の可能性を調査研究し、まとめたものである。調査研究にあたっては、沖縄の地方語に関する多くの先生方と、多くのネイティブスピーカーの方々（地方語を元々話すことができる方々）にご教示をいただいた。このまとめを世に表すにあたり、筆者を、特に地方語の片言の使用者として温かく育てて下さった方々に厚くお礼を申し上げ、これが、筆者自身の沖縄に対する理解を今後一層深めていくための土台となり、また、図らずも自己の国語力の向上につながったことをこの上なく喜ぶとともに、この地方語が、実用の分野で第二の言語として存続し、伝統性豊かな、新しい魅力に満ちた、次元の高い沖縄文化の形成に役立つよう、切に祈るものである。

現代において、一つの言語が発展するためには、その言語による活字文化の成熟が是非とも必要であると考える。ところが、沖縄の地方語については、若干の活字出版物はあるものの、いまだ活字文化といえるには至っていない。

以下は、沖縄の実用地方語の活字文化の根幹となるべき活字表記の現状にかんがみ、特に発音との関係を重視し、その発展のための一つの礎材を研究し、提案としてまとめたものである。衰退の傾向にある沖縄の実用地方語が、これによって新たな活字文化を生み、伝統性を損なうことなく、第二の実用言語として新たな価値をもって発展していくことを期待するものである。

現在、沖縄の実用地方語の文字表記は、すべて国語の文字によっている。しかし、沖縄の地方語の中には国語の発音体系に含まれないものがあって、本来ここに沖縄の地方語の特色があるにもかかわらず、この特色があまり生かされていない状況にある。このことは、沖縄の実用地方語の発展にとって大きな障害である。

沖縄の地方語の表記法にかかわる研究材料は多数あるが、以下では小例を設けてその要を得たいと思う。

たとえば、2 iN tu majaa（国立国語研究所編、沖縄語辞典における音韻表記、以下同じ）における tu は、国語の一つの文字で表すことができない。よってこの表し方に焦点をあててみる。

tu を「と」で表わすことは、すでに一部の著述者が実行している。しかし、これでは「とー」を too と読ませにくいなどの不便がある。また、tu について「と」の活字の次に、これより小さい活字の「ぅ」を添付し、「とぅ」と表わしているのがある。これは原理的には同意できるが、実用上はかなり問題がある。その理由は、tu が一音の語であるのに「とぅ」が二字であることと、表記の態様が現に統一的でないことにある。たとえば、添字であるべき「ぅ」の、「と」との相対的大きさが印刷によってまちまちであり、また、印刷者や校正者の認識が十分でないために大きくなって「とう」となるなど、読むに堪えないものまで現われている。そしてこの傾向は特に漢字の振り仮名によく現れている。

沖縄の地方語の発音要領を知らない人にとっては、「と」の字はどのような状況のもとでも to としか読めない。つまり、国語読みしかできないのである。従って「とぅ」と、「と」に「ぅ」を小さく添えてあっても、tu を軽く tou と発音させるための工夫であると思われてしまう。

これまで、沖縄の地方語の活字表記は一著の中では統一されていても、全体としては統一性に乏しく、各著者が各様の工夫で国語の文字を用いて表してきた。しかし、このような状態は活字文化の発展のためには感心しない。

（沖縄語研究家）